

第 71 回 教育研究会報告 音楽科

知覚・感受って何だろう？

－鑑賞教材を効果的に活用した歌唱表現の創意工夫－

ふるかわ ゆうすけ
古川 裕介（中学・高校）

1. はじめに

大阪教育大学附属高等学校三校舎の中で音楽科専任教員がいるのは天王寺校舎だけであり、筆者は毎年多くの音楽科実習生を担当している。また毎年 4 月下旬には、大阪教育大学教育協働学科音楽表現コース 4 回生教員免許取得者全員を対象とした教育実習オリエンテーションも担当しており、音楽科教員を志す学生のリアルな声を聞く機会がある。学生に対し、音楽科授業を構想する上でどのようなことが不安かを問うと、多くの学生は「知覚・感受をどのようにさせればよいか分からない」「感受を促す発問がうまくできるか不安だ」などと述べ、音楽科教育をすすめる上で知覚・感受が何よりも大切であるという事実だけが刷り込まれ、知覚・感受という言葉が独り歩きしている現状があると感じている。筆者も大学生の頃から同様の課題意識を持ち、悶々とした気持ちを抱いたまま音楽科教員となり今に至る。中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編には、知覚・感受について次のように解説されている。【ここで言う知覚は、聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識することであり、感受は、音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れることである。本来、知覚と感受は一体的な関係にあると言えるが、指導に当たっては、音楽を形づくっている要素のうちどのような要素を知覚したのかということと、その要素の働きによってどのような特質や雰囲気を感じたのかということと、それぞれ確認しながら結び付けていけるようにすることが重要となる。そのため、今回の改訂では、知覚・感受することに留まらず、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることとし、その重要性を一層明確にした。】この記述からも、知覚・感受は音楽科教育において重要な概念であるということは伝わってくるが、「なぜ知覚・感受が大事なのか？」「知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることがなぜ重要なのか？」についての記載がなく、このあいまいで捉えにくい解説によって、学校現場において知覚・感受

という言葉による混乱が生じる原因となっているのではと考えた。知覚・感受させることをねらって（目的として）授業を展開すると、音楽科教育のあるべき方向性を見誤ってしまうのではないかと危惧している。本研究会では、知覚・感受のあり方について考えるために、「鑑賞教材を効果的に活用した歌唱表現の創意工夫」という授業テーマを設定し、領域分野を横断した授業開発を試みた。「ワークシートに知覚・感受したことを分けて書かなければならない」といった音楽科教育特有の「～すべき」とらわれることなく、生徒たちが自律的に学習することのできる音楽科授業をめざすとともに、知覚・感受の概念をポジティブに捉え直す授業実践となればと考えている。

参考）知覚・感受に関する学習指導要領上の記述
・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）より
共通事項

(1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。

・高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）より
共通事項

(1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。

2. プログラム

令和 6 年（2024 年）11 月 9 日（土）実施
「鑑賞教材を効果的に活用した歌唱表現の創意工夫」
授業Ⅰ（10:00～10:50）【中学校 1 年 D 組】
授業Ⅱ（11:10～12:00）【高校Ⅱ年 A・D 組音楽選択】
場所：南館 4 階音楽室・演習室
授業者：古川 裕介（本校教諭）

研究協議（13:00～14:30）場所：南館 4 階音楽室
指導助言：長谷川 諒 氏（神戸大学非常勤講師）
司 会：米谷 優（本校非常勤講師）

3. 授業Ⅰ（中学校）の記録

鑑賞教材を効果的に活用した歌唱表現の創意工夫 ～ハモることへの興味・関心を高める合唱授業～

（1）題材について

題材名：ハーモニーの構造を意識して、「COSMOS」
を合唱しよう

①教材観：音楽ユニット「アクアマリン」の一員
ミマスが作詞・作曲をし、後に作曲家の富澤裕が
2000 年に混声三部合唱作品へと編曲した。教科書
にも掲載されており、校内合唱コンクールでもよく
演奏される定番曲である。音域的にも無理がなく、
歌うのが苦手な生徒や変声期の生徒にとっても、の
びやかに声を出しやすいと考えられる。また、1 番
冒頭のユニゾンの部分や、2 番冒頭のソプラノ→ア
ルト→男声と順に出てくるポリフォニックな部分な
ど、テクスチュアと歌唱表現との関わりを考えるた
めに必要な要素が多くあると考えられる。

②生徒観：本学級は、歌うことに抵抗のある生徒が
少なく、自己表現しようとする前向きな姿勢がみら
れる。ただし、まだ周りの生徒の様子を見て消極的
になってしまう部分も見受けられる。1 学期の歌唱
分野の学習では斉唱が主であったが、今回初めて本
格的な混声三部合唱作品にチャレンジする。「まず、
やってみよう！」の精神のもと、学級全体の明るい
雰囲気を生かし、西洋音楽的なスタイルで作られた
合唱の題材であったとしても、音高の間違いを恐れ
ずのびのびと声を出せるようにしたい。

③指導観：音楽表現を創意工夫するため、忌憚のな
い意見交換を行うことができる温かい雰囲気づくり
を心がける。そのために、他者に対する礼儀や思い
やりの精神等が音楽表現する上で必要不可欠である
ことを、適宜具体的な例をあげながら伝える。また、
今回は合唱におけるテクスチュアの理解のため、参
考資料として合唱の常時活動（発声練習、ハーモ
ニー練習）などへの動機づけとなるような鑑賞教材
を毎授業冒頭に提示し、深い学びへとつなげたい。
さらに、本校で毎年 3 月に開催される中学音楽会に
向けて、「自分たちで自分たちをレッスンする力」
を育み、クラスで主体的に合唱練習をすすめるた
めのスキルを身につけさせるとともに、合唱を楽しむ
ために必要な知識や技能を楽しみながら学習するこ
とで、ハモることの喜びを実感できる授業展開とし
たい。

（2）授業で扱う教材（楽曲）について

「COSMOS」（ミマス 作詞・作曲 富澤裕 編曲）

※学びの参考資料としての主な鑑賞教材

モノフォニーの例

「キリストは今日生まれ給いし」（グレゴリオ聖歌）

ポリフォニーの例

「鳥の歌」（C. ジャヌカン作曲）

「フーガ ト短調」（J. S. バッハ作曲）

ホモフォニーの例

バッハのコラール

（3）題材の評価規準：

知識・技能	・声の音色や響き、テクスチュア（モノフォニー・ポリフォニー・ホモフォニーそれぞれの特徴）について理解している。（知識） ・創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能を身につけている。（技能）
思考・判断・表現	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、これらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌唱表現を創意工夫している。
主体的に学習に取り組む態度	音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

（4）題材の指導計画（全 6 時間）：

・合唱音楽の歴史から学ぶ モノフォニー・ポリフォニー・ホモフォニー ※「COSMOS」合唱練習はパート別練習形式で	3 時間
・ハーモニーの構造を手がかりに、歌唱表現を工夫する ※「COSMOS」合唱練習は少人数アンサンブル（各パート 4 人ずつ計 12 人）形式で	2 時間 本時
・合唱実技テスト ・題材のまとめ（テクスチュアに関するアセスメントシート）	1 時間

（5）研究授業当日の授業展開

前時までに取り扱った合唱音楽の歴史に沿って鑑賞した内容を復習し、モノフォニー・ポリフォニー・ホモフォニーの音楽的な特徴について確認。その際、過去の学習プリントを参照し、他者との対話を通して理解を促進させた。次に、以下の 3 点に留意したウォームアップをおこなった。（①楽しみながら歌

唱表現することのできる場の雰囲気づくり ②声をのびやかに出すための技能習得 ③テクスチュアへの意識づけ）COSMOSを一回通して歌い、現時点での課題を確認したあと、①「どの部分が～フォニーっぽいと思いますか。あるいは、ハーモニーの構造で特徴的な部分はどこでしょうか？」②「～フォニーに適した歌い方、ハーモニーの特徴を生かした歌い方についてグループで考え、アンサンブル練習しよう」というメインの発問を投げかけ、20 分間の少人数アンサンブル練習を実施した。その際、練習が停滞しているグループには、具体的に「ここはどのような音楽的な構造になっている？」などと問いかけをし、気づきを促した。最後にグループ練習での気づきを全体で共有し、再び全声部を通して合唱した。さらに、少人数アンサンブル練習をする前と後でどのような変化があったのかを生徒たち同士で意見を共有する場を設定し、振り返りをおこなった。

（6）生徒の反応

授業後に実施したアンケートより（対象：中学 1 年生 144 人中 回答 123 人 回答率約 85%）

「今回、歌唱表現を創意工夫するための参考資料としていくつかの楽曲（グレゴリオ聖歌、鳥の歌など）を鑑賞しました。本題材を通して、鑑賞した経験（学び）を歌唱表現に生かすことができましたか？」という問いに対し、約 77%の生徒が肯定的な回答をした。（図 1）さらに、今回の副題に関する設問「今回の題材を通して、「ハモる」ことへの興味・関心は高まりましたか？」の問いに対して、約 95%の生徒が肯定的な回答をした。（図 2）本授業が、ハモることへの興味・関心を高め、生徒たちが自律的に合唱活動に取り組む素地が育まれたのではないかと考える。

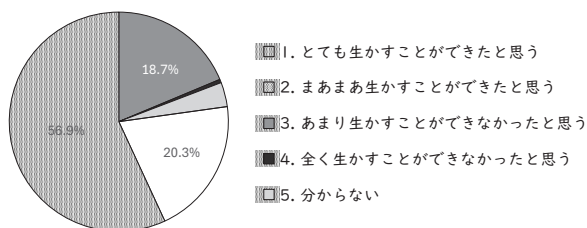


図 1 鑑賞した経験を歌唱表現に生かすことができたか

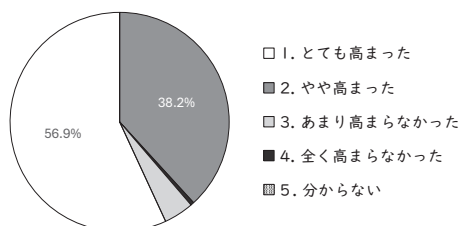


図 2 ハモることへの興味・関心が高まったか

※「ハモることに対する興味・関心が高まったか」という設問に対して、「とても高まった」と回答したある生徒の自由記述を紹介する。

いつも私はバナナマンのハモりをみているのですが、前までは「なんでそんなにつられるんだろう？」と疑問に思っていたのですが、今回実際に私自身が COSMOS でハモりを体験したことによって「ここはつられやすそうだな」や逆に「どんな歌い方をしたら相手がつられやすくなるんだろう？」と考えるようになったから。

下線部は、「バナナサンド」（TBS 系列）という番組でのハモり我慢ゲームのことを指していると考えられる。本授業でテクスチュアの学習をしたことで、このゲームを音楽科の学習をもとに俯瞰的に捉え、意図的につられやすくするためにハモリパートを歌っている歌手の視点からも考えることができています。この生徒の記述は、美しいハーモニーを生み出すこととは一見相反するようにも感じられるが、ハーモニーそのものに興味・関心を持ってほしいという教師側の授業の意図は伝わっているといえる。今後も、多角的・多面的にハーモニーに関する学習をすすめていくことで、より学びが深化していくと考えられ、今回の学びのねらいは十分に達成できたといえるのではないかと。

授業Ⅱ（高等学校）の記録

鑑賞教材を効果的に活用した歌唱表現の創意工夫～ジャズらしさを自らみつけ、歌唱表現に生かす合唱授業～

（1）題材について

題材名：「ジャズの特徴を生かして、ジャズミサ“グローリア”を合唱しよう」

①教材観：伴奏にピアノトリオを用いたジャズテイストなラテン語による小ミサ曲。グルーヴィーなキリエ、スウィングするグローリア、スローなサンクトゥス、軽快なベネディクトゥス、そしてブルージーなアニヌス・デイの 5 曲で構成されている。今回取り上げるグローリアは、A-B-A 形式となっており、A は Quick 4 with swing、B は Slow feel と表記されている。ピアノトリオ、スウィングというジャズにおけるキーワードを軸に、ジャズらしさを合唱という媒体で体感、表現することのできる楽曲であると考えられる。

②生徒観：本音楽選択クラスは、全体的にはおとなしいが、このように音楽表現をしたいという思いや考えを持つ生徒が多くいることがワークシートなどから読み取れる。合唱においては、男声パートは荒削りながら力強く発声できる一方、女声パートの人

数が男声よりかなり少ないこともあり、不安からか歌唱表現が消極的になってしまう部分が見受けられる。なお、本音楽選択クラス生徒が中学 1 年生の頃から筆者が音楽科授業を担当しており、今年度で 5 年目となる。（中高一貫の強みともいえる。）生徒自身のもつ音楽に対する潜在的なエネルギーを最大限に引き出せるような授業展開を心がけたい。

③指導観：今回は鑑賞教材（学びの参考資料）を通して知覚・感受した経験をもとに、どのような点が歌唱表現に生かせるのかを生徒たち自身で考えるという極めて抽象度の高い問いを設定している。そのため、自由闊達な意見交換ができる授業の雰囲気作りを心がけ、教師は生徒の学びをファシリテートする役割に徹したい。また、グループで考えたことを踏まえ、実際の歌唱表現に生かす場面では失敗を恐れず生徒たちがのびのびと声を出して自己表現できるように支援する。

（2）教材について

A Little Jazz Mass（Bob Chilcott 作曲）より
2. Gloria グローリア

※学びの参考資料としての主な鑑賞教材

- ・Maple Leaf Rag（メイプル・リーフ・ラグ）
ラグタイム
- ・The Entertainer（ジ・エンターテイナー）
ラグタイム
- ・Fly Me to the Moon（私を月につれていって）
ピアノトリオ
- ・In The Mood（イン・ザ・ムード）
スウィング・ジャズ

※研究授業当日【グループでの鑑賞曲リスト】

- ・A Fine Romance
- ・Nice Work If You Can Get it
- ・What a Wonderful World
- ・That Old Feeling

（3）題材の評価規準

知識・技能	・曲想や表現上の効果と音楽の構造との関わりについて理解している。（知識①） ・スウィングのリズムと表現上の効果について理解している。（知識②） ・ジャズ・ヴォーカリストの発声の特徴と表現上の効果について理解している。（知識③） ・創意工夫を生かした歌唱表現に必要な曲にふさわしい発声を身につけ、歌唱で表している。（技能）
-------	--

思考・判断・表現	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、これらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴いている。さらに、その経験をもとに、どのように歌うかについて表現意図をもっている。
主体的に学習に取り組む態度	ジャズの特徴と歌唱表現との関わりについて関心を持ち、主体的・協働的に歌唱・鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

（4）題材の指導計画（全 17 時間）

・ジャズミサ譜読み～「まずやってみよう」の精神でチャレンジ～ ・自分のパートの旋律の流れを覚える （少人数アンサンブル形態で）	10 時間
・学びの参考資料として、ラグタイムとピアノトリオ作品を鑑賞し、ジャズの特徴について考える	2 時間
・発声練習（ジャズのリズム感、和声感を意識したウォームアップ） ・前時のジャズ鑑賞活動を踏まえて、グローリアの歌唱表現をする上でどのような点が生かせるのかを考える ・ジャズミサ グローリア 合唱練習	1 時間 本時
・ジャズミサ 全曲合唱練習 ピアノ・ドラム（生徒が演奏）との合わせ	2 時間
・ジャズミサ 全曲演奏（音楽選択生校内発表会）	2 時間

（5）研究授業当日の授業展開

授業開始直後、いきなりジャズのリズム感、和声感を意識したウォームアップ（具体的にはセブンスコードを用いたアルペジオの発声パターン）をおこない、本時への学びの雰囲気を醸成した。あえてこの発声練習の意味を言葉で説明しなかったのは、生徒たちを知らず知らずのうちにジャズが鳴り響く空間へと誘いたかったからである。まず復習として、前時に鑑賞した「In The Mood」（スウィング・ジャズ）を再び取り上げ、ジャズの音楽的な特徴について考えた。次に、ジャズ・ヴォーカリストが歌うジャズの楽曲 4 曲を参考資料として提示し、6 人程度のグループで、歌い方にどのような特徴があるのかを約 15 分間意見を交流した。あえて抽象的な問いを設定し、教師側から音楽的に考えるべき範囲を限定

せずに（指導事項の焦点化をせずに）、自由な発想で意見交換ができるよう支援をし、指導助言の長谷川氏が述べる「非他律的態度」を育むことをねらいとした。その後、「グローリア」の歌唱表現を創意工夫していく上で、ラグタイム、ピアノトリオ、スウィングジャズ、ジャズヴォーカルの楽曲を鑑賞したことを踏まえ、どのような点が生かせるのかをパートごとに考え、最後に全員で合唱した。

（6）生徒の反応

研究授業後の振り返りアンケートより

授業後、生徒たちには学びの振り返りも兼ねて、以下のような問いを投げかけた。「今回は歌唱表現を創意工夫するための参考資料として鑑賞教材を提示し、歌唱と鑑賞を往還しながら、ジャズらしさについて一緒に考え、そのことが歌唱表現につながればと思い授業を設計しました。このような学びの形についてあなた自身はどのようなことを思い、感じたのか。授業全体の感想も含めて教えてください。」授業者が想像する以上に、こちらの授業設計のねらいを理解し、共感してくれていると読み取れる記述が多く、今回実践した授業設計が一定効果をあげていると言えるのではないかな。以下生徒の記述を抜粋して記載する。

- ・鑑賞を踏まえて演奏することで頭の中により強固なイメージが形作られるため、非常に良かったと思う。また、仲間との交流を通じて今までにない新しい意見も知ることができた。

- ・ジャズ演奏の鑑賞を通して、ジャズにおける楽器の立ち位置やソロボーカルの拍の取り方（特にシンコペーション）、スウィングなどについて理論的に学ぶのではなく、実際に耳で聞いて周りの人達と意見を共有しながら、ジャズ特有のリズムや拍を感受し、自分の歌唱にも取り入れることができたと思っている。具体的には、スウィングやシンコペーションだけでなく、ジャズ特有のゆったりした雰囲気というものは理論的に解説するだけでは伝わりにくいと思う。私はこれを実際に聞くことによってジャズの歌い方を、他のジャンルの曲を歌唱する時と、少し差別化して、ゆったりと流れるように歌えるようになったと思う。総じて体験と実践が結びついたこのような授業は、私の音楽の学びをより深くしてくれたものだと確信している。

- ・鑑賞によって興味が引き立てられ、それをすぐに実践するという流れがとてもやりやすさを感じた。当日グループごとに分かれることによってだらけてしまう部分もあったので、個人個人の意識でそこは

律すべきだと思った。

- ・鑑賞と歌唱を混ぜることで、飽きずにすぐ意識して活かせると思うのでいいと思った。

- ・今回のジャズ演奏に対して、よりよいものを作り上げるために効果的な活動であるように感じた。当日は今まで聞いてきたジャズ以外にも有名な物から自分の知らないもの、女性が歌っているものから男性が歌っているものまでたくさんの種類のジャズを聴いて、ジャズ全体としての表現の仕方や歌い方の特徴などを理解することができたのではないかと思います。

- ・鑑賞というものは歌唱をよりよくするためのものであると思うので、公開授業でのこの学びの形は正当だと思う。確かに自分の小学校、中学校での音楽の授業では鑑賞と歌唱は別々の時間に行われていた記憶がある。今回の鑑賞と歌唱の往還を体験してみて、鑑賞と歌唱の往還は別々に取り上げるよりも歌唱に生かせるものだったと思った。また、今回の授業ではなるべく少人数で鑑賞することによって、鑑賞を通して思ったことや雰囲気的なことを共有しやすくする目的があったのだと推測しているが、これは実際音楽室で全員一斉に鑑賞するよりもその目的は達成しやすいと思う。そしてそこで鑑賞したときに思ったことを共有することによって、「三人寄れば文殊の知恵」というふうに意見が多様なものになり、より多くのジャズに関するポイントに気づくことができたのだと思う。なので、今回の授業はジャズの歌い方を考えるという点でとても有意義な授業だった。

- ・普段、ジャズの歌唱を聞くことがないので、歌の練習の最中に聞くことで、すぐに実践することができ、同時に行うメリットがあったようにかんじられる。

- ・たくさんの種類の音楽を聴けて純粋に楽しかった。人の歌声によって系統が同じ曲でも、感じるものが違うことを実感した。

4. 研究協議の記録

質問 1

参観者 A 中高ともに歌うことを楽しんでいる。自分たちの演奏を聴いて、見て、どう感じたかではなく、鑑賞教材を見て、構造を感じて歌うということがおもしろい。中学生の歌声が授業の最初と最後で大きく変化したと思うが、どのように評価し、何が要因だと考えるか。

古川（授業者） 音とり音源が主流になってきており、楽譜を見ずに歌う生徒が多い。合唱作品におけるハーモニーがどうなっているかを考えるため、西

洋音楽の歴史的な流れに沿ってハーモニーの変遷を紹介することを通して、知覚することで生徒たちの間で議論が起こる。結果でなく、そこに着目したことが大切で、歌にそれが表れていた。ハーモニーに着目できたということ、楽譜を見て歌っていたことが評価できる。

長谷川（指導助言） 実際に歌う曲の鑑賞教材を聴いて確認することが多いが、あえて混乱が起こる教材を使用したことで、必ずしもそこに着目していなかった生徒もいたが、歌としては表現されていた。子どもたちの演奏から、テクスチュアを意識したであろう発想が垣間見えた。20分話し合う時間が設定されていたが、どの生徒もきちんと話し合う。先生が答えを出さないから話し合うし、話し合ったことが歌に表現されていておもしろかった。今回の授業はひらたくいえば、「声部の役割」についての授業だが、そこにテクスチュアに注目した鑑賞を挟んでいるのが面白い。誤配の可能性を含んでいるからこそ、子どもの気づきに広がりがあり、試行錯誤の余白があった。

質問 2

参観者 B 中学生の歌が最後に変化したことに感動した。テクスチュアという要素が難しく、漠然としているにもかかわらず、先生が答えを出さないから色々な表現が出てきて、どのように音楽と関わらせるかが難しかったが、広くすることでつながるということがわかった。高校授業の冒頭でのダバダバダーの発声の意図を教えてほしい。

古川 ジャズの理論的な指導もした方が良いとは思いますが、限られた時間の中で、ジャズの和声を応用した発声練習のパターンを何も説明せずに用い、いつもと何かが違うということを生徒が感受できるようにしかけた。

長谷川 発声練習を通して、ジャズの和声を知覚・感受しているかどうかはわからないが、説明せずに暗に仕込むという発想がとてもよかった。

長谷川 諒先生 ミニ講演

タイトル「音楽科教育の訂正可能性」

①「知覚と感受」理論をどう生かす？

「感受したこと」を言語化させる授業には疑問が多い。一方、学習指導要領に「知覚したことと感受したこととの関わりについて考える」よう書かれていることも事実。したがって「知覚と感受は心理学的・哲学的に疑わしい！」と単に批判しても、「良い音楽科教育」の実現には寄与しない。そもそも「実証的事実」とは現時点において最も妥当そうな

仮説に過ぎない。私達にできるのは「良い音楽科教育」の実現に寄与するような「知覚と感受」理論の捉え直し（ポジティブな「訂正」）である。

→「知覚と感受」に対する訂正可能性を探る

②「知覚と感受」理論の他にも音楽科教育には無批判に是とされる慣例的教義がある

「子どもの口から授業の目標を引き出すことが大事だ」「協働的学習活動を取り入れるべきだ」「子どもたちには“本物”の音楽を経験させるべきだ」

これらは、ある場面においては有用であり、ある場面においては無用である。我々は「慣例的に良いとされている理論や実践」に相対したとき、「これらは本当に「良い音楽科教育」に寄与するのか？ 寄与するとしたそれはどんな状況においてだろうか？ そもそも「良い音楽科教育」とはなにか」と批判的に考え続けなければならない。「感受」は「感じたことの言語化」から「知覚を参照した表現」へと訂正され得る。

→慣例に対する「非他律的態度（the attitude of anti-heteronomy）」の重要性

質問 3（指導助言者への質問）

参観者 C 美術科では“感性”という言葉を使う。～の感じというモノが社会的、文化的背景で～と言われていることに個人の記憶は関わらないのか。“感性”については記憶の働きであるといわれているが、個人の記憶の中から引き出すことで個人の中から出てくるのではないか、引き出すことに意味があるのかと思うのだが、記憶の働きについてはどう考えるか。

長谷川 HUNTER×HUNTERのアニメの中でモーツァルトの楽曲が使われているが、モーツァルトを聞いたことがなければ、アニメの曲と認知するだろう。私の見解としては、それを音楽科として扱うときに、過去の経験を探るより音をきけというのではない。音をヒントに心の中を探る活動をメインにするのか、あるいは音自体に着目するのかどちらがよいのかという話。

参観者 C 音楽の質感を引き出すというのは記憶の引き出しから出すことではないか。

長谷川 音楽科のいう感受はもっと具体的なことである。それを音楽科の重要な学習事項としてとり入れるべきかという話。

参観者 C 美術科では“あなたの感じたものを表現する”ということが言われていて、主題生成のところで記憶を頼りに作ることに重きをおいて物をつくるからその違いかもしれない。

長谷川 音楽科では、既存の曲を演奏・鑑賞する再

現芸術が取り扱われるところが美術科との違い。

質問 4（指導助言者への質問）

参観者 D 学習指導要領解説の文言で、感受は感じを「受け入れること」に重きを置かれていることに違和感がある。心に入ることを知覚と感じているが、難しい。

長谷川 学習指導要領はあくまで大綱的なもので大きく外れなければ問題ない。

質問 5（指導助言者から授業者への質問）

長谷川 知覚したことを言語化するのではなく表現するという授業だったが、どう思うか。

古川 指導内容の焦点化を捉え直す実践であった。テクスチュアと言いながら、生徒たちには手の内を詳細に明かさずとも結果的に学習するという授業だった。表現することで知覚と感受を往還するということにつながっていた。

長谷川 焦点化するなら、既存の楽曲は使わないべきであるが、それが難しい。指導事項を丁寧に相対化していた。分類してと言いながら、例外はあるなど小さな言い訳がすごく大切である。唯一絶対的なものでないと言っていないから、最後まで生徒は考えるし、“たしかに”という話ができる。古川先生の授業は表テーマが知覚と感受、裏テーマが指導内容の焦点化であるように感じた。また、大学で講義をする際、90分というまとまった内容を伝えようとすると最後はかなり総括をする。古川先生は絶対にそれをやらない。中学生では残り1分しかないのに、中学生に丸投げにしたことで自律的に練習していることにもつながっている。自己決定的な活動の方が子供たちは学習するということは事実かもしれないと感じた。

質問 6

参観者 E 鑑賞したものを絵で書かせている。私としては知覚は知識で、感受は個性と感じる。音楽ではどちらも大切だから難しいのではないかな。音楽を聞かせてどれだけ感動したかをみる実験をしているが、それを評価するということも使い分けしている。評価というと責任がでてくるから、感受の部分の評価は難しい。今の3観点の評価はそれでいいのかな。中学の授業は知覚を題材にした教材だったが、高校は感受を題材にした教材だったから、悪く言えば結果には表れにくい内容だったと感じた。音楽科としては大切にしたいことだが、難しい。

長谷川 個性みたいなものをどうするかというと、学習指導要領では含めないと明示的に書いてある。

趣味趣向みたいなものは評価に含めないということが原則である。客観的な判断材料だけで評価しないと教師が守られない方向に進んでいるが、それはよくない。温かみのある人間関係の中で評価ができるのが理想だがなかなか難しい。それがどうにかなるように行政が動かないといけないと思う。

古川 今回の授業では、知覚と感受はあまりわけて考えていない。あとから見たらそうなっているだけである。

5. 今後の展望

本授業実践を受けて、指導助言者長谷川氏からは「感受」は「感じたことの言語化」から、「知覚を参照した表現」へと訂正され得るのでないかという講評をいただいた。音楽を聴いて感じたことを言語化しなければならないというステレオタイプに音楽科教員は無意識のうちに縛られていただけなのではないか。研究協議では、参観者から非常に多くの感想や意見をいただき、充実した学びの場となった。知覚・感受のあり方について議論していく中で、音楽科教育の存在意義や価値はどのようなところにあるのかという本質的な問いに立ち返ることができ、月並みではあるが教師が自律的に授業をデザインすることの重要性に気づかされた。引き続き本研究課題のもと実践事例を積み重ね、知覚・感受理論の捉え直しをすすめ、附属天王寺音楽科としての考えをまとめていきたい。

参考文献

長谷川諒(2023)『中学校音楽「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価完全ガイドブック』明治図書
長谷川諒(2024)『音楽科教育はなぜ存在しなければならないのか ―「良い音楽科教育」を構想するための目的論』明治図書

謝辞

本稿の授業研究の一部は、一般財団法人青松会中学・高校新教育研究助成を受けています。厚く御礼申し上げます。